



DIABLO
LORD OF HATRED

悪夢の翼の上で



ロラス

短編小説
作: JONATHAN MABERRY

ストーリー
JONATHAN MABERRY

イラスト
LINDSAY KERNER

編集
MEGAN WALKER

デザイン
SOPHIE ERB

アートディレクション
ALEX CRESWICK

ロア・コンサルテーション
IAN LANDA-BEAVERS

クリエイティブ・コンサルテーション
MATT BURNS, CASSIEL CHADWICK,
CHLOE FRABONI, ZAVEN HAROUTUNIAN,
DAVID LOMELI

プロダクション
HANNAH MATTISON, BRIANNE MESSINA,
TAKAYUKI SHIMBO, JT TORREA, TRACY WANG



Blizzard.com

© 2026 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardとBlizzard Entertainmentのロゴは、
米国またはその他の国におけるBlizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。
Published by Blizzard Entertainment.

この物語はフィクションです。名前、登場人物、場所、出来事は作者またはアーティストの想像の産物であるか、
架空の存在として使われており、生死を問わず実在する人物、事業体、出来事、
場所に類似するものがあつたとしても、それはまったくの偶然です。

Blizzard Entertainmentは作者または第三者のウェブサイトおよびそのコンテンツについて一切管理を行わず、
それらに対する一切の責任も負いません。



今こそ、この神託者の女王の声に耳を傾けよ。現在、過去、そして未来を知るのが私の役目だ。

夢は眠れる精神の入口だ。眠れる精神は闇深き場所であり、窓を砕き、道を封鎖しても、真実の侵入を阻むことはできない。

夢の中で我々は計画し、希望を抱き、考え、信じる...そしてあらゆる葛藤を解決し、自らの秘密を全て解き明かした時、我々は目を覚ます。

見よ、万物がその信念に歓喜している。まるで夢を抱いた夢想家の旋律がその意思を顕現させるかのようだ。

だが、夢の中で真実が明らかになるわけではない。真実は、蜘蛛の巣が張る悪夢の廊下で発見の時を待ちわびているのだ。

しかし、それには代償が伴う。

そう、大きな代償が...





ロラス

ロラスは夜に押されるがままに進んだ。それは望ましいことではなかった。彼は歩きながら、誰かにつけられていることに気づいていた。

追っ手ではない。なぜならその影に潜みし者は彼を決して捕まえようとしなかったからだ。その代わりにそれは、逃げたくなるほど、彼を恐怖のどん底に突き落とした。ポールアームの準備はできていた。だが構えることはしなかった。その追跡者が不死かもしれないかったからだ。

ロラスは臆病者ではなかった。彼は多くの戦いを乗り越えてきた。だがこれは... これは... 何かが違っていた。

だから彼は何日も一睡もせず、よろめきながら逃げ回り、ついにこの町にたどり着いた。彼は最初に見つけた宿に入った。宿の扉は重いオーク製で、鉄の門がかかっていた。

影の中には入ってこなかった。束の間の希望がわき上がってきた。去ったのだろうか？同じ道を進んでいた、ただの旅行者だったのだろうか？恐怖を誤解と言い聞かせるために、彼は次々と嘘をでっち上げた。そして... 狭いベッドの布団に潜り込む準備をしながら、自分の恐怖が事実無根であることを証明するために、彼は最後にもう一度窓の外に目をやった。

それはそこにいた。通りの反対側にある舗装路のひさしの下に、影のような黒い何かが、おぼろげに見える。ロラスからは顔も肌も剣も見えず、そこにあるのは暗闇だけだった。

待っている。

信仰を持たず、光もないロラスには、祈る対象がいなかった。彼に耳を貸してくれそうな聖人はいない。それでも彼はそれから無関心そうな青白い月に視線を移し、一言つぶやいた。

「どうか...」

しかし彼には、誰や何に言うべきなのかさえわからなかった。

彼はベッドに入ったが、そこに逃げ場はなかった。浅い眠りの中、期待を裏切ってしまった人々が姿を現した。友人や同胞... 彼を信じて絶望した人々、そして破滅が彼を見つけ出し、まるで

殺人者の群れのように彼に群がった。彼らは刃物の代わりに言葉で彼を突き刺し、彼がいくら慈悲を求めても、一切耳を貸そうとしなかった。

不毛な眠りから目覚めたロラスはぼんやりとしながら、服を着て再び夜の中へと戻った。まるで先に肉体だけが目覚めていたような彼に意識がようやく追い付くと、彼はいつの間にか見知らぬ荒野の広がる町外れにいた。建物はどれも古く、作られたのではなく自生したかのように、奇妙にねじ曲がっていた。苔むした角は丸みを帯び、錆びた釘から屋根板がぶら下がっている。シャッターがまるで瀕死の獣の肺のように音を立てながら開閉している。上に見える黒く染まったいくつもの窓の一部から、心許なさそうな黄色い光が漏れている。誰かがそこでうずくまって暖を取ろうとしているのは明らかだった。

「助けてくれ」と人気のない通りに向かってつぶやくその声は、柔らかいがあまりにも大きく、粗野で耳障りだった。聞いていたのは空だけで、その無関心さの重圧に彼は押しつぶされそうになった。居心地はよくなかったが、彼はかつてその抱擁の中で育まれた存在でもあった。彼の兄弟であるホラドリムたちは、決して夜を恐れなかった。彼らは真実と強さの象徴であり、闇を照らす松明だった。その炎は明るく揺らめき、ホラドリムたちはその光の傍らで杖と巻物を掲げてサンクチュアリを守った。

彼はその炎の光を必死に求めた。その暖かさを。

例の謎の存在がついてきているか振り返って確認するまでもなかった。

ロラスは「どうか」と再び言った。まるで夜そのものに懇願するように。どうしたらいいかわからず、彼は歩き続けた。

その足取りは重く、ぎこちなく、不格好だった。彼のブーツの底は、丸石や出っ張りだけでなく、影の縁にすら引っかかった。彼は風を避けようとしたが、どちらを向いても風からは逃げられなかった。

彼を追っていたそれが、まるで冷気を生み出しているかのようだった。その氷の刃は、獲物を追う騎兵隊のように、彼を切り裂いた。

「ひとりにしてくれ」 彼は叫んで振り返ったが、それはまったく動じなかった。

目の前の焼け落ちた
森の灰の中に、ねじ曲がった
1本の生きた木が立っていた。

どういふわけか、
信じられないことに、
彼は囁きの木にたどり着いていたのだ。

彼の次の叫びは言葉ではなく、いわば恐怖と絶望の音だった。彼は歩みを早めようとした。そのつもりだった。だができなかった。風が襲いかかのように唸り声を上げ、この極寒の地での時間感覚を彼から奪った。彼は立ち止まると、窓枠や馬を繋ぐ杭にしがみつ、凍った肺に必死に温かい息を取り込みながら、辺りを見回した。暗がりから人々が現れては、彼の側を通り過ぎた。中には怯えたような視線を彼を向け、逃げ出す者もいた。墮落者を見た人々がそうするように、嘲笑する者もいた。中には見覚えのある顔もあったが、彼自身も確信が持てなかった。彼はほかのホラドリムも目にしたが、誰もが傷だらけだった。剣、爪、魔法。それが彼らの命を奪っていた。

これも魔術の類いだろうか？魔法にかかっているのだろうか？

彼は歩き続けた。町から遠く離れ、丘を登り、暗い溪谷をもがきながら進んだ。すると突然、衝撃的な感覚が彼を襲った。足を止め、体を揺らし、口を開けたまま、目の前の光景に釘付けになった。ありえないものがそこにはあった。こんな場所にあるはずがない。

目の前の焼け落ちた森の灰の中に、ねじ曲がった1本の生きた木が立っていた。どういうわけか、信じられないことに、彼は囁きの木にたどり着いていたのだ。

彼は後ずさった。「違う」と彼は叫んだ。「ここであるはずがない。こんなに遠くまで来たはずがない」

真夜中があざ笑いながら彼の横を通り抜けた。

ロラスは必死に辺りを見回した。

なぜここに？なぜ今？

リリスの死で終わりを迎えた道と引き換えに、彼はそれに自らを捧げたはずだ。そのとおり。だが状況は改善しなかった。憎悪の帝王、メフィストが解放されたのだ。多くの犠牲が生まれ、状況は悪化の一途を辿っていた。

かつてないほどに、世界はこの邪悪な魂に支配されていた。彼はその計り知れない重みに引きずられながら、木に向かって小さく踏み出した。

振り返ると、おぼろげな存在はまだそこにいた。彼から少し離

れた場所に立ち、ぼろぼろのクロークが冷たい風にはためいている。

あれがここに連れてきた。彼はそう思った。あれがこの不愉快な場所に私を導いた。だがなぜだ？私に何を望んでいる？

頭上の雲が晴れ、彼の立っている場所に月が光を注いだ。ロラスは冷たい拳に胸壁を叩かれるかのように、自分の心臓の鼓動を感じた。現実が血まみれの断片となって彼の周り散らばっている。彼は自分が、苦痛に歪んで永遠に凍りついてしまったかのような、乾燥した灰色の草地に立っていることに気づいた。雲のような灰色の節足生物たちが、もどかしいほどゆっくりと草間を這っている。盾のような大きさのキノコが膨らんだ莖に曲がってもたれかかっている。そして空はできたばかりの傷跡のような色をしていた。

囁きの木が目の前に立ち、その節くれ立った枝を四方八方に伸ばしている。どの手足からも奇妙な果実がぶら下がっていた。カボチャのように大きく、丸みがあり、悍ましかった。

声が言った。「おお、来たか、古き孤高なるロラスよ！」

彼は振り返った。最初は追跡者の声だと思ったが、心の底ではその声が、あの不気味な果実の近くから聞こえてきたことを知っていた。

あれは果実ではない、瓢でもない。

枝からぶら下がっているのは人間の頭だ。血まみれな死体ではなく、生きたまま、戦利品のように飾られている。それは囁きの木の一部なのだ。言葉を発したのはその古びた舌だった。ロラスはその理由がわかっていた。

「やめろ」と彼は訴えた。「まだ私の時ではない。戦争はまだ続いている」

ぶら下がったいくつもの頭が残酷に笑った。その口からは血が噴き出し、目から真紅の涙が流れ出ている。

「恥知らずのロラスしかいないのか？」ほかの頭が囁く。

3つ目の頭が彼を嘲笑する。「あれはすべての者の期待を裏切る」

ロラスは自分の耳を両手で塞いだ。「そ、それは、ち、違う」と彼



は口ごもりながら言った。

「お前が見捨てた者たちにそう言うがいい」と頭が一斉に叫んだ

「違う!私は誓いを守った」

「ドナンにそう言え」と頭が笑った。「お前は期待に応えられなかった」

「ネイレルやティラエルにそう言ってみろ」と、ほかの頭が笑った。そして次々と、目を大きく見開き、耳障りな声を上げながら、いくつもの頭が笑った。頭たちは彼の失敗をあげつらい、その数を数え、彼の誤った判断で人生を狂わされた人々のことを無理やり思い出させた。彼の傲慢さと過信が原因だ。彼を信じた者は破滅に追い込まれたのだ。

ロラスは、背後から謎の存在が近づいてくるのに気づいた。あれは何なのだ?彼に裏切られた人々の怒りが具現化したものなのか?彼が作り出した死の影なのか?それとも彼が見捨てた人々?彼が崩壊させた数々の人生?

なぜかわからないが、彼はその推測が正しいと感じていた。彼は自分の行動の結果と差し迫った自らの確実な破滅の間で板挟みになっていた。

それでも彼は、その傷だらけの魂の中に残された勇気の断片を見つけた。「違う」と彼は叫ぶと、頭とその亡霊に向かって話し始めた。「私は闇に立ち向かい続けてきた...」

「エライアスにそう言えばいい」と、ほかの頭が嘲笑し、ロラスが目を見ると、驚いたことにそこにはエライアスがいた。彼の頭だ。その首は切断され、血に染まっている。非難の炎を宿した目をした、エライアスだ。

「聞いてくれ」とロラスは懇願した。「私は全力を尽くした...」

無数の憎悪の声のひとつひとつが彼を黙らせ、それと同じぐらい厳しい非難の声が彼を打ちのめした。「ネイレルにそう言ってみろ!」

「違うんだ、やめてくれ!」ロラスの叫び声は彼らを沈黙させ、耳を傾けさせた。

まるで慈悲を求めるように。

頭たちは黙り込んだが、エライアスは彼をじっと見据えていた。

「ふむ... 案ずるなロラス。しかるべき報いはすぐに来るだろう。」

「たのむ、やめてくれ...」

「お前はすぐにここに来る」

「この世に残るわずかな正義に誓って、それは違うんだ。」

「私のもとに... 我々のもとに来るのだ...」

「嫌だ、やめてくれ!」

「その時は近い」とエライアスが囁いた。「もうすぐ... もう目の前だ...」

彼は胸の中からこみ上げる恐怖に抗い、視線を上げた。そうすべきではなく、いい結果にならないとわかっていたが、顔を上げた。そしてロラスは、ぶら下がるいくつもの頭の下で、冷たい風に吹かれて揺れている、もっとも恐ろしい果実を目にした。

それは彼自身の頭だった。口は半開きになり、肌は青白く、目は純然たる失敗に対する恐怖に染まっていた。ロラスが振り返ると、復讐の魂が両手を上げて爆発し、夜のような黒いカラスの群れに分裂した。カラスは彼に襲いかかり、彼を殴りつけ、彼を跪かせた。



ロラスはその恐ろしい地から悲鳴を上げながら逃げ出した。

その悲鳴は闇の世界に響き渡った。

彼は悲鳴を上げながら、今まで横になっていた、小さな寂れた宿のベッドの上で目を覚ました。

彼が振り返ると窓台に1羽のカラスがとまっていた。その目は漆黒だったが冷たい炎を宿しているように見えた。

ロラスは枕の下からナイフを取り出してカラスに向かって突き出した。激しい憎悪と恐怖に染まったその刃は窓台に深く突き刺さった。

だがカラスは夜へと逃れていた。

彼が崩れ落ちるようにベッドに戻ると、夜空に響くように音が

浮遊した。それはカラスの鳴き声で、まるで彼をあざ笑っているようだった。ロラスはまるで地獄に口づけされたかのように、炎の熱さと、硫黄の臭いを感じた気がした。



これでわかっただろう。

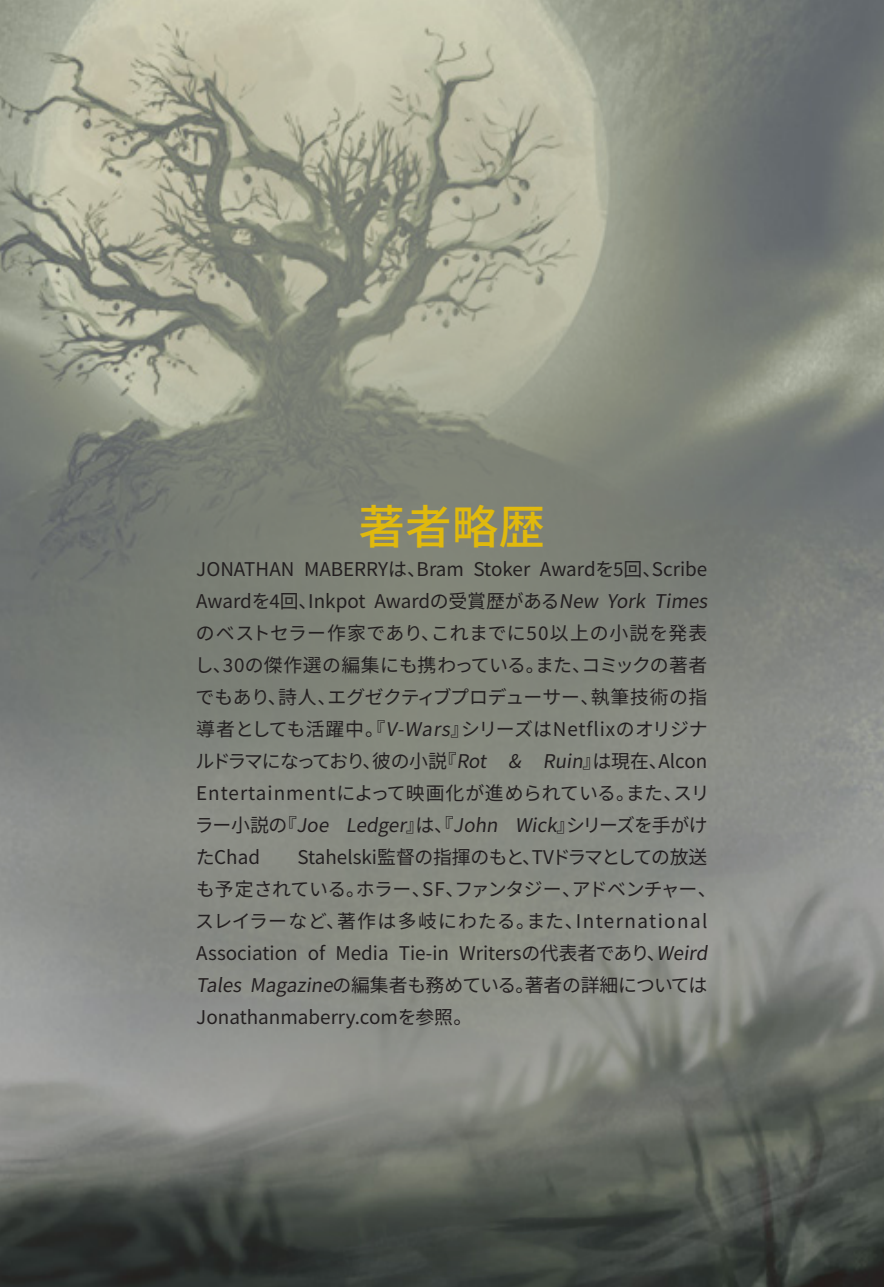
学者も女王も戦士も、自らの魂の本当の所有者ではない。知識の結果からは誰からも逃れられないのだ。誰もが自分たちがなしてきたことに苦しめられている。あらゆる選択が、我々を今ある道へと導いてきたのだ。正しさを確信した時でさえ、決断を下すたびに、それはまるで刃物のように突き刺さる。その傷口から希望が流れ落ち、我々は純粋さを失う。傷を負うたびに、自らの肉と血が腐敗していくのだ。

そして...

一部の者はその精神をそう簡単には汚染されない。その善悪を... 誰が判断できるだろうか？

私は自分の夢... 自分の悪夢から目覚める。この目が恐怖から視線を逸らしても、私には今も見えている。私は今も理解している。言葉が私の口からこぼれ落ちる。

「何かが来る」と私は言う。そして外の木々の中で、数千の鳥が恐怖し、ざわめいている。「何か恐ろしいものが... 近づいている...」



著者略歴

JONATHAN MABERRYは、Bram Stoker Awardを5回、Scribe Awardを4回、Inkpot Awardの受賞歴がある*New York Times*のベストセラー作家であり、これまでに50以上の小説を発表し、30の傑作選の編集にも携わっている。また、コミックの著者でもあり、詩人、エグゼクティブプロデューサー、執筆技術の指導者としても活躍中。『V-Wars』シリーズはNetflixのオリジナルドラマになっており、彼の小説『Rot & Ruin』は現在、Alcon Entertainmentによって映画化が進められている。また、スリラー小説の『Joe Ledger』は、『John Wick』シリーズを手がけたChad Stahelski監督の指揮のもと、TVドラマとしての放送も予定されている。ホラー、SF、ファンタジー、アドベンチャー、スレイラーなど、著作は多岐にわたる。また、International Association of Media Tie-in Writersの代表者であり、*Weird Tales Magazine*の編集者も務めている。著者の詳細についてはJonathanmaberry.comを参照。